

第1章

幼児理解と評価の基本



1. 幼児理解と評価の考え方

(1) 幼稚園教育の充実のための基本的な視点

中央教育審議会は、教育基本法、学校教育法の改正等を踏まえ、平成20年1月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申を行いました。これを踏まえ、平成20年3月28日に学校教育法施行規則を改正するとともに、発達や学びの連続性、幼稚園での生活と家庭などでの生活の連続性を踏まえた幼稚園教育の充実、子育ての支援と預かり保育の充実など改善の基本方針を下に、幼稚園教育要領を改訂し公示しました。

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っています。

幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出合う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていきます。幼児は、環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こしていくのです。そうした体験の連なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていきます。

そのため、幼稚園では、「環境を通して行う教育」を幼稚園教育の基本として示し、幼児の遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して、人とかかわる力や思考力、感性や表現する力などをはぐくみ、人間として生きていくための基礎を培うことが大切であることを明確にしているのです。

幼稚園教育においては、学校教育法に規定された目的や目標が達成されるよう、幼児期の発達の特性を踏まえ、幼児の生活の実情に即した教育内容を明らかにして、それらが生活を通して幼児の中に育てられるように計画性をもった適切な教育を行うことが大切です。つまり、幼稚園教育においては、教育内容に基づいて計画的に環境をつくり出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮し展開する生活を通して、望ましい方向に幼児の発達を促すようにすることが重要です。その実現のために必要な視点として、以下のものを挙げることができます。

○幼児理解からの出発

幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めることです。



幼稚園における保育とは、本来、一人一人の幼児が教師や多くの幼児たちとの集団生活の中で、周囲の環境とかかわり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営みです。そのために、教師は幼児と生活を共にしながら、その幼児が今、何に興味をもっているのか、何を實現しようとしているのか、何を感じているのかなどをとらえ続けていかなければならないのです。幼児が発達に必要な経験を得るための環境の構成や教師のかかわり方も幼児を理解することによって、はじめて適切なものとなるでしょう。すなわち、幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくるのです。

○温かい関係を基盤に

幼児期は、周囲の大人に対する信頼感に支えられて自分の世界を広げ、自立した生活に向かうようになる時期です。幼稚園においては、このような幼児期の特性を踏まえて、教師と幼児の温かい信頼に満ちたものにしていくことが重要です。幼稚園教育要領解説では、自然な心身の成長に伴い、幼児が能動性を発揮して環境とかかわり合う中で状況と関連付けて生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程が発達であるとしています。幼児期の発達を促すために必要なこととして、幼児期の能動性という視点を重視していますが、それについては以下のことが大切です。

- ・人は周囲の環境に自分から能動的に働き掛けようとする力をもっていること
- ・幼児期は能動性を十分に発揮することによって発達に必要な経験を自ら得ていくことが大切な時期であること
- ・能動性は、周囲の人に自分の存在や行動を認められ、温かく見守られていると感じるときに発揮されるものであること

ここでいう能動性の発揮とは幼児が活発に活動する姿のみを指しているわけではありません。黙って周囲の動きを見つめている幼児の姿も、相手の話に聞き入る姿も、その幼児が能動的に周囲の環境とかかわっている姿として受け止めることが大切です。このように教師には幼児の行動や心の動きを温かく受け止め、理解しながら、幼児との間に信頼関係を築くことが求められています。幼稚園においては、そうした教師と幼児の温かい関係が幼児の発達を促す上で重要な意味をもつことを踏まえて、保育を展開することが必要なのです。

○一人一人の特性に応じた教育

教師が望ましいと思う活動を、一方的に幼児に行わせるだけの保育では、一人一人の発達を着実に促すことはできません。幼児の発達する姿は、たとえ同年齢であってもそれぞれの幼児の生活経験や興味・関心などによって一人一人異なっています。一見すると同じような活動をしているようでも、その活動が一人一人の幼児の発達にとってもつ意味は違っているのです。したがって、毎日の保育の中では、それぞれの幼児の生活する姿から、今経験していることは何か、また、今必要な経験は何かをとらえ、それに応じた援助をすることが大切です。

かつては、同じことを同じ方法で、同時期に、どの幼児にも指導しようとする傾向が見られました。しかし、このようなやり方では、発達する姿の違う一人一人の幼児に対して適切な援助ができないばかりか、自分から環境にかかわろうとする意欲すら失わせてしまいます。

教育に求められるものは、人間を画一的に育てることではなく、自分らしさを発揮



し、心豊かに意欲をもって生きることのできる人間の育成です。幼稚園では、行動の仕方や考え方などに表れたその子らしさを大切にして、一人一人の幼児が、そのよさを発揮しつつ、育っていく過程を重視しなければならないでしょう。

(2) 発達や学びの連続性を確保するための視点

○子どもの発達や教育を長期的な視点でとらえる

学校教育法では、幼稚園教育の目的として、義務教育及びその後の教育の基礎を培うことが強調され、学校教育としての連続性を踏まえた教育を行うことが重要とされています。また、幼稚園教育要領では、小学校以降の教育の基礎を培う幼稚園教育の在り方を確認した上で、児童との交流や、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けることなど、連携を図るようにすることが求められています。

それに対応して、小学校の学習指導要領では、小学校が幼稚園や保育所と連携すること、国語、音楽、図画工作の教科において、1年生の指導に当たり幼稚園教育の教育内容との関連性を考慮すること、生活科と特別活動において幼児と触れ合うことが求められています。小学校学習指導要領解説では、生活科を中心に入学当初の合科的・関連的指導を行うためのスタートカリキュラムを進めることが示されています。また従来と同様に、幼稚園教育における幼児の育ちの様子を伝えるために指導要録の抄本又は写しが小学校に送付され、指導の参考に供されます。

特に学校教育の連続性という観点からいえば、子どもの発達や教育を長期的な視点でとらえることを踏まえながら、幼稚園の教育課程と小学校の教育課程が幼児の学びの流れというところでつながるようにしていくことが重要です。

○幼稚園と小学校との学びのつながりを意識する

幼児期は何より楽しさを求めて活動を行う時期です。したがって、幼稚園では幼児が遊びを通して楽しさや面白さを感じつつ、様々な物事を体験することを大事にしており、その楽しい活動の過程や結果として学びが成り立っているのです。そうした学びと関連し、幼児は集中する力や持続させていく力などを身に付けながら、生活を充実させていきます。

児童期に入ると、幼児期で培った学びや様々な力を基に、子どもは目的に向け、自己を統制したりする力が高まっていきます。小学校における学びは学習に特化された授業という枠の中で、教師により示された学習の目標を改めて自分の目標として自覚し、その自覚化された目標に向けて努力することにより成り立っています。そこでは子どもは学習者として、課題に向かって集中し、持続する力を発揮して、学んでいき

ます。教師や他の子どもの発言をとらえ、自らの考えと結び付けて発展させ、それを言葉にし表現していきます。自らの知っていることとその場で得られる情報とをつないで新たな知識の組織化を図っていくのです。

幼稚園教育から小学校教育への円滑な移行には、幼稚園と小学校の教師が学びのつながりを意識して、こうした二つの教育原理の橋渡しをしたり、中間的な教育課程や学習環境の在り方の工夫をしたりするなどして、発達や学びの連続性を確保することが大切になります。

○幼稚園教育を小学校教育へつなげる

教師は、幼児が教師や友達と生活を共にする中で活動し、そこで成り立つ学びが小学校以降の生活や学習の芽生えとして培っていきけるようにすることで、小学校教育の基盤となるようにすることが大切です。

そのためには教師は教育内容の多様性を確保しつつ、幼児の遊びから様々な方向へ学びが展開する様子を見いだすとともに、幼稚園での幼児の生活に根ざした学びをつくり出していくことが大切です。

幼稚園では、教師に支えられながら、幼児同士の関係の中から互いに協力することが芽生え、その協力し合う関係を生かして、一人ではできそうもないことに取り組んでいます。こうした幼児が協力して物事にかかわり活動する中で幼児同士の人間関係は深まっていきますが、またそうした活動を通して、教師の助言を受けつつ、一緒に実現したい共通の目的を見だし、更にそれを具現化するために互いに協力して活動に取り組むようになります。そして、幼児は自分と他者の思いを共に実現できるかを考えるなかで、自己を一方的に主張することを抑制しながら、対象に即した学びによる自己発揮が可能になっていくのです。

幼児が協同的な学びの活動を幼稚園で存分に経験できるようにするとともに、幼稚園の生活や遊びの中で、幼児が自己発揮し、また自己抑制できるように援助していくことも大切なことです。そして、幼児が教師や友達とのかかわりを深め、楽しい経験を積み重ねるにつれ、きまりや約束事など社会規範にかかわることへの気付きが増すとともに、相手や周りの人への思いやりを育て、自分の気持ちを調整しつつ、周囲との関係をつくるようにすることも大切です。こうした自己発揮・自己抑制と気持ちを調整していくことは教科等の学習を中心とする小学校以降の教育の基盤

形成に重要なことですから、幼稚園の教師の適切な援助が必要です。

また、小学校の教育では自ら考えたことを言葉で表現し教師や友達と意見を交換しながら自らの考えを深める学習が中心となります。幼稚園の教育では、生活体験を通して、その基盤となる言葉による豊かな表現や言葉の感覚などをはぐくむとともに、言葉による伝え合いを育てていくことが大切です。幼児と教師が一緒になり、声にもならない声も互いに聞き取り、つなげていきます。それらが言葉による表現活動や質問活動に展開していくとともに、物事を言葉の表現を通して考えていく際の基礎となっていくのです。すなわち、学校教育が十分に機能するためにも、幼児期に体を使って十分に活動し、様々な対象にかかわり、また、その体験を言葉その他により表現し、振り返ることも大切なのです。こうしたことが、小学校教育に引き継がれ、小学校の授業を成り立たせる力へとつながっていきます。

このように、幼稚園では小学校以降の生活や学習の基盤を成り立たせる根本の力を育てています。それを幼稚園の教師が自覚し発展させつつ、幼稚園教育の在り方を問い続けていくことで、学校教育としての連続性を確かなものにしていくことができるのです。



(3) 幼児を理解し、保育を評価するとは

○幼児を理解するとは

幼児を理解することが全ての保育の出発点であることは、既に述べたとおりです。しかし、幼児を理解するといっても、幼児の行動を分析して、この行動にはこういう意味があると決め付けて解釈をすることではありません。まして何歳にはこのような姿であるというような一般化された幼児の姿を基準として、一人一人の幼児をその基準に照らして、優れているか劣っているかを評定することではないのです。また、幼児と幼児を比較して誰が誰より優れているか劣っているかを評定することでもありません。幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指しているのです。そのためには、安易に分かったと思い込んだり、この子はこうだと決め付けたりしてしまうのではなく、幼児と生活を共にしながら、「……らしい」「……ではないか」など、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていこうとする姿勢が大切なのです。



実際には教師が幼児の行動を見て「こんな思いをもっているのではないか」「こんな行動をするかもしれない」などと推測しながらかかわっていても多くの場合、予想外の姿に気付いて、それまでの見方を変えることになるでしょう。

- ・ 幼児の生活する姿から、その幼児の心の世界を推測してみる。
- ・ 推測したことを基にかかわってみる。
- ・ かかわりを通して幼児の反応から新しいことが推測される。

このような循環の中で徐々に幼児の行動の意味が見えてくるのです。

また、幼児の発達の理解を深めるためには、教師が幼稚園生活の全体を通して幼児の発達の実情を的確に把握することや、一人一人の幼児の個性や発達の課題をとらえ

ることが大切です。これらのことも幼児の心の世界に近づいてみようとする中で、次第に見えてくることです。

さらに、幼児を理解することは、教師のかかわり方に目を向けることでもあります。幼稚園生活の中で幼児の行動や心の動きが生み出される背景には、教師のかかわり方が大きな意味をもっていることを忘れてはならないでしょう。幼児の興味や関心のもち方は教師のかかわり方によって方向付けられますし、何気なく使う言葉や態度はそのまま幼児の中に取り込まれていきます。遊びに集中できない、不安定になる、依存してばかりなどの幼児の姿は、教師のかかわり方の結果であることも多いようです。教師のかかわり方との関係で幼児の行動や心の動きを理解しようとするのが保育を見直し、その改善を図るために大切なことです。

○保育における評価とは

「評価」という語は、優劣を決めたり、ランクを付けたりする成績表のようなイメージで受け止められることがあります。そのため、幼児の発達をゆがめる恐れがあるとして、幼稚園教育に評価は不必要だとする意見も一部にあるようです。しかし、教育を行うために評価は欠くことのできないものであり、適切な教育は適切な評価によってはじめて実現できるものです。幼児期にふさわしい教育を進めるためには、保育における評価とは何かを明確にとらえることが必要です。

幼稚園教育要領解説では、「反省や評価は幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である」として、幼児の発達する姿をとらえることとそれに照らして教師の指導が適切であったかどうかを反省・評価することの両面について行う必要があることを示しています。幼稚園における評価とは幼児を他の幼児と比較して優劣を付けて評定することではありません。保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかをとらえながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることが評価なのです。幼稚園の保育は一般に次のようなプロセスで進められます。

- ①幼児の姿から、ねらいと内容を設定する。
- ②ねらいと内容に基づいて環境を構成する。
- ③幼児が環境にかかわって活動を展開する。
- ④活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う。

具体的な保育は、この①～④の循環について、幼児の活動と経験を予想した指導計画を立てて行われますが、この計画は一つの仮説ですので、実際の幼児の生活する姿に応じて、これらの全ての点について適切かどうかを検討しながら改善していかなければなりません。

すなわち、実際に幼児が生活する姿から発達の全体的な状況、よさや可能性などをとらえ、それに照らしてみても、

- ・教師のかかわり方は適切であったか。
- ・環境の構成はふさわしいものであったか。
- ・あらかじめ教師が設定した指導の具体的なねらいや内容は妥当なものであったか。

などについて、反省・評価をすることが必要なのです。

このような評価は常にそのための時間を取って行わなければならないというわけではありません。日常的な素朴な反省も保育の改善に役立ちうるものです。例えば、一日の保育の後に、教師が今日の生活の流れを振り返ることがあるでしょう。そして、あの幼児はなぜあのような姿を見せたのだろうかと考えたり、あの幼児にはこのようなよい面があったと気付いたり、教師としてこのようなことをすればよかったのにと反省したり、幼児の力を更に発揮させるには環境をどうしたらよいかと考えるでしょう。このような誰でもごく普通に行っていることが評価なのです。

つまり、日々の保育と評価は常に一体になっているものであり、ごく日常なことであるということが出来ます。



(4) 小学校の評価の考え方について

小学校においては、児童の学習状況の評価（学習評価）が行われています。この学習評価は、きめ細かい指導の充実や児童一人一人の学習の定着を図るため重要な役割を有しています。

学習評価は単に児童の成績を付けるためだけではなく、学習指導と学習評価の一体的な取組を通じて、学習指導の在り方を見直したり、個に応じた指導の充実を図ったり、学校における教育活動を組織として改善したりするために行う大切なものなのです。

現在、小学校における学習評価は、一定の集団における児童の相対的な位置付けに基づくいわゆる相対評価ではなく、「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）により行われています。また、各教科の学習評価については、基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているか、それらを活用して課題を解決するために考えたり、判断したり、表現したりする能力をもっているか、主体的に学習しようとしているかなど、具体的に児童にはぐくもうとする資質や能力に沿って「観点別学習状況の評価」が行われています。

「観点別学習状況の評価」とは、学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況を分析的に評価するものであり、幼稚園の評価とは異なる方法です。平成20年改訂の学習指導要領に対応した「観点別学習状況の評価」を行う際に用いられる評価の観点については、評価の観点と学習指導要領に示された学力の三つの要素との整理が図られ、おおむね、基礎的・基本的な知識・技能は「知識・理解」及び「技能」の観点で、思考力・判断力・表現力等は「思考・判断・表現」の観点で、主体的に学習に取り組む態度は「関心・意欲・態度」の観点で評価するものとされました。なお、各教科の観点は、各教科の特性に応じて教科ごとに示されています。

観点の一つである「思考・判断・表現」は、従来「思考・判断」としていた観点を変更したものです。この変更は、平成20年改訂の学習指導要領において、思考力・判断力・表現力等を育成するため、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動を重視するとともに、言語活動の充実が求められたことから行われました。各小学校では、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した授業を実施するとともに、適切な評価を行うことによって、児童に思考力・判断力・表現力等を身に付けさせることが必

要です。

また、国際的な調査により、日本の子どもの学習意欲に課題がある中で、児童が自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることも重要です。そのため、各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童が身に付けているかどうかを「関心・意欲・態度」の観点で評価していく必要があります。

「評定」は、児童の教科の学習状況を総括的に評価するものです。小学校低学年については、平成3年の学習評価の改善の際に、児童の発達の段階の特性や学習の実態等を考慮して、すべての教科について「評定」の欄を設けないこととされましたが、小学校の中・高学年については、すべての教科について3段階で評定を行うこととされています。評定は、簡潔で分かりやすい情報を提供するものであり、教師同士の情報共有や保護者等への説明のために使用されています。

また、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する「個人内評価」が小学校において重視されています。児童のよい点をほめたり、更なる改善が望まれる点を指摘したりするなど、発達の段階等に応じて励ましていくことで、児童の学習意欲を高め、その後の学習や発達を促していくことができます。このため、一人一人のよい点や可能性、進歩の状況等について評価して児童に伝えることも重要です。

以上で述べてきたように、幼稚園と小学校では、評価の方法等は異なりますが、評価を行う目的は幼稚園も小学校も同様の考え方に立ちます。すなわち幼稚園教育要領では、評価について「指導の過程についての反省や評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図ること」を示しており、保育と評価を一体的に行い、評価の結果を保育の改善に生かすこととしています。一方、小学校学習指導要領でも、「児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」を示しており、指導と評価の一体化を重視しています。今後も、子ども一人一人に学習指導要領の内容が確実に定着するよう、学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが求められています。

2. よりよい保育をつくり出すために

幼児理解と評価は保育をつくり出すために欠くことのできないものです。幼児の生活する姿をどのようにとらえて、保育の改善に生かしていくかについては、幼稚園教育指導資料第1集『指導計画の作成と保育の展開』に詳しく述べられています。この節では新しい発達観、保育観に立って幼児を理解し保育を展開するためには、どのような視点から何をとらえることが必要かについて、基本的小さくおきたいことの中から五つを取り上げています。

(1) 幼児を肯定的に見る

幼児の行動は、教師の見方や接し方で大きく変わっていきます。これまでの保育では、幼児がよりよい方向に伸びて欲しいと願う気持ちからはと思いますが、教師の目がその幼児の問題点ばかりに向けられてはいなかったでしょうか。

幼児は周囲の人に自分がどう見られているかを敏感に感じ取ります。教師が幼児に何か問題を感じながら接していると、どうしてもその幼児に接するときの態度や表情、言葉などにそれが現れてくるようです。その結果、幼児と教師の心のつながりが失われてしまったり、その幼児らしい動きができなくなったりしてしまうこともあります。

反対に、その幼児の育ちつつある面やよさに目が向けられていると、自然にかかわり方が温かいものになり、その幼児の行動を信頼して見守ることができるようになります。幼児は自分に好意をもって温かい目で見守ってくれる教師との生活では安心して自分らしい動き方ができるし、様々な物事への興味や関心が広がり、自分から何かをやろうとする意欲や活力も高まってきます。

このようなことから、教師が一人一人の幼児を肯定的に見てそのよさや可能性をとらえようとするのが、幼児の望ましい発達を促す保育をつくり出すために必要となるのです。

〈事例：S教師の記録より〉

U児（4歳児）、入園してから5月中旬になっても自分の保育室（さくら組）では遊ばず、登園すると、ふらふらと園庭へ出かけて行ってしまふ。他の幼児たちは学級の中で自分の好きな遊びを見つけ、安心して遊びを楽しんでいるのに、U児は学級の中に居場所がないように思える。遊んだ経験が少ないのだろうか。さらに、私を避けている様子もある。誘いかけても無駄という感じがする。

新入園児を迎えた頃のS教師の記録です。「ふらふらしているU児」が記録の中に毎日のように登場しています。どうやってU児とかかわったらいいのか、S教師はかなり悩んだようです。なぜ遊べないのか。どうして保育室が嫌いなのか、……。とにかく気になるU児の行動を何とかしたいという思いから、S教師はある日、U児の歩くとおりに歩いてみることにしました。

U児と共に動いてみて、S教師は一つの大きな発見をしました。同じ動きをまねてみて同じ目の高さで見たり、感じ取ったりするうちに、初めてU児自身の感じている世界を見ることができたといいます。アリの行列、赤土の粒、白いものを運んでいる働きアリ。U児の手には花壇の隅に咲いていた黄色いカタバミの花が……。

「Uちゃんて小さなものでもよく見ているんだ」S教師は、自分には見えなかった楽しさをU児から教えてもらったように思いました。今までは、とらえどころのないふらふらしている幼児として、気にかかる存在でしたが、だんだん、「何とかかわいい」と思えてきたのです。U児が見つけた小さな花を保育室に生けたりしながら、S教師とU児の間のぎこちない関係がとけていったのです。そして、S教師の心の中でU児の存在が、好奇心に満ちて行動している姿に変わっていったようです。

毎日の保育の中では、どうして落ち着かないのだろうかとか、わがままばかり言ってなど、気になる幼児の姿ばかりが教師の目に入ってくる場合があります。しかし、この事例のように、その幼児と同じ行動をとってみたり、記録を読み返してみたりすることなどから「あの子には、こんないいところがあるんだ」「こんなことに興味があるのか」「こんなユニークな発想の仕方をしている」などに気付くことが多いのです。

また、他の教師との話し合いや、保護者との話などから、その幼児の持ち味や素晴らしさに気付いて、その幼児に対する見方が変わることもあります。

例えば、A教師は、一人一人の幼児の姿をありのままに受け止めようとする中で、

友達のまねばかりしているように見えたY児の姿が、周囲の出来事に関心を持ち、自分の生活の中に取り入れようとする姿として、目に映るようになってきたそうです。

B教師は、入園後2か月を過ぎた頃から泣くことが多くなったC児について、これまでの記録を読み返すことによって、手のかかる幼児という見方から、泣くことで自己主張ができるようになってきた姿ではないかと見方を変えてきています。

肯定的に見るといっても特別な才能を見付けたり、他の幼児との比較で優劣を付けて、優れている面だけを拾いあげたりするというものではありません。まして、幼児の行動の全てをそのままに容認したり、放任したりしてよいということではないのです。それは、教師が幼児の行動を見るときに、否定的に見ないで、成長しつつある姿としてとらえることが重要なのです。

これまで述べたように、同じ幼児の行動でも教師の見方によって、その姿は違ったものになります。そして、それは違った教師のかかわり方となって現れてくるでしょう。



〈事例：走ってはだめ〉

6月初旬のある朝、4歳のK児が靴を脱ぐのももどかしそうに、遊戯室めがけて廊下を走りこんできた。O教師は思わず「危ない！ 走ってはだめ！」と強い口調で叱りつけた。

同じ場面を見た担任のM教師の反応は少し違っていた。「Kちゃん、張り切ってるね」と声をかけながら抱き止めた。そして、「お部屋から、飛び出してくる子がいると、ぶつかるよ、走らずに行こうね」と言ってきかせている。K児はしっかりとうなずいて、ニコニコしながら遊戯室に入っていった。

この事例から、O教師とM教師とのK児の受け止め方の違いが、K児の行動に対する違った働き掛けとなって現れていることが読み取れると思います。

O教師の目にはK児の姿が「走ってはいけない廊下を走っている幼児」として映ったのだと思います。M教師は、初めての幼稚園生活への緊張が解けてきて、やってみたいことがたくさん見つかるようになってきたK児の最近の様子から「今日は〇〇をしよう」と張り切って登園してきた姿として受け止めていたのです。

危ないこと、やってはいけないことなど、幼児の生活の中には、状況に応じて指導しなければならないことがあります。しかし、そのような指導が幼児の心に届いて、必要なこととして幼児が身に付けていくためには、まず、M教師のように教師が発達しつつあるものとして幼児の姿を受け止め、温かいかわり方をすることが何よりも大切なことです。

幼児を肯定的に見るためには、次のようなことが大切になるでしょう。

- ・様々な幼児の姿を発達していく姿としてとらえる。
- ・その幼児の持ち味を見付けて大切にすること。
- ・その幼児の視点に立つ。

これらのことはどれも、教師が一人一人の幼児に対する見方を変えようとする積み重ねの中で可能になることといえるでしょう。

(2) 活動の意味を理解する

繰り返し述べているように、保育は幼児自身が活動することを通して様々な経験を積み重ね、発達に必要なものを身に付けていけるように援助する営みです。しかし、同じように見える活動であっても、一人一人の幼児がその活動において経験



していることは、同じとは限りません。したがって、一人一人の幼児に適切な援助をしようとするならば当然、その幼児にとって、今行っている活動がどのような意味を持っているかを理解することが必要です。活動の意味とは、幼児自身がその活動において実現しようとしていること、そこで経験していることであり、教師がその活動に設定した目的などではありません。そして、活動において幼児自身が経験したことがその幼児の内面的成長にどのように関係するか理解することも大切です。

かつて、教師が望ましい活動を選択して幼児に与えることによって、発達が促されるという考え方がありました。そのために、「活動」を「ごっこ遊び」「運動遊び」などのようなまとまりのあるものだけを指していると受け止めて、教師の目はどちらかといえば、その系統性や発展性だけに向けられてしまう傾向があったようです。その結果、一人一人の幼児がそこでどのような経験をしているかを見落としてしまうことになってしまったのではないのでしょうか。

幼稚園教育要領では、「活動」は幼児が環境にかかわって自ら展開するものであるとしています。それは、どのような活動を幼児に与えるかではなく、幼児自身が活動を生み出して展開する過程で得る様々な経験を大切にしたいということを表したものともいえます。

一人一人の幼児にとって、活動がどのような意味を持っているかを理解するために

は、教師が幼児と生活を共にしながら、なぜこうするのか、何に興味があるのかなどを感じ取っていくことが必要です。目の前に起こる活動の流れだけを追うのではなく、それを周囲の状況や前後のつながりなどと関連付けて考えてみることで、その幼児の心の動きや活動の意味がだんだんと理解できるようになるでしょう。

S児とR児が積み木で遊ぶ姿から、二人にとっての活動の意味を考えてみましょう。

〈事例：S児とR児の積み木遊びから（4歳児 5月）〉

保育室の中央に積んでおいた中型の積み木に、S児が登園してくるなりすぐに興味を示し、積んだり並べたりしはじめた。

何を作るというわけではなさそうだが、思いつくまま置いている。何となく囲いようになったので、教師が「この中に入りたいな」と声をかけた。S児は、はっとしたというような表情をして、一つの角を戸のように開けて「ここから入るの」と開け閉めしている。そこへ、R児が来て、「僕もやりたい」と頼んでいる。S児に「だめ」と言われて、S児の周りをうろうろしている。しばらくしてR児は「手伝ってあげる」と言って、S児の表情を見ながら、やっと積み木遊びに参加しはじめた。

この記録は、ある日の保育の一コマをとらえたものですが、同じ積み木で遊んでいる活動であっても、S児とR児にとっての意味は異なっていることが読み取れるでしょう。

S児にとっては、積み木を使って並べるうちに、いろいろなものができてくる楽しさを味わう場になっているようです。作りながら湧いてくるイメージで次々と積み方を変えています。いつもなら一緒に遊ぶR児に対しても「だめ」と拒否の姿勢を見せています。それほど積み木に夢中な姿とも受け取れるでしょう。

一方、R児にとっては、S児とのかかわり方をR児なりに工夫していることに意味があるのでしょう。これまでのR児ならきっと、相手の作っているものをかまわず壊してでも自分の思いどおりに参加したでしょうが、積み木でS児と一緒に遊びたい一心から、「手伝ってあげる」という参加の仕方を考え出しています。担任は、当初、困った幼児としてR児の行動を受け止めていたようですが、徐々に、R児が人とのか

かわり方を様々に試しているのだという見方をするようになってきています。R児は入園まで、家族の中だけの生活で、同年代の幼児とのかかわりの経験が少なかったため、自分の思いを相手にスムーズに伝えることができにくいのは無理のないことなのでしょう。

この事例に出合って、教師はR児自身が育つ姿を改めて見た思いがしたということです。そして、教師は今後の保育の中では、様々な活動を通してR児がこのような経験を積み重ねて、人とかかわり方を身に付けていけるように支えていこうと考えています。S児に積み木遊びに入れてもらえた喜びは、きっとよい経験となっていくでしょう。

その幼児にとっての活動の意味を理解するためには、一人一人の幼児の発達の道筋の中で、その意味をとらえることが大切です。これまでのその幼児の生活する姿の特徴を周囲の物や人との関係でとらえ、それと目の前の姿と関連付けてみることで、その幼児の活動の意味をかいま見ることができます。

幼児がやりたいこと、かかわりたいことは何なのかを考え、その幼児にとってその活動を展開する意味を理解していくことが幼児一人一人の発達する姿をとらえることになり、また、その活動を通して幼児一人一人が発達にとって必要な経験を得ているかどうかという評価へとつながっていくのではないのでしょうか。そして、その視点が環境を再構成するなど、次の保育への手立てを考えていく上で欠くことのできないことなのです。



(3) 発達する姿をとらえる

一人一人の幼児がその子らしさを発揮しながら、発達に必要な経験を得ていく場としての幼稚園においては、幼児の生活する姿から発達を読み取ることが大切な意味ももちます。

それでは、幼児の発達する姿は、どこから読み取れるのでしょうか。「発達」というと、あれができるようになった、これもできるようになったという、表面に現れた事象だけに目を奪われがちです。確かに、幼児が様々なものを獲得していく姿には、目覚ましいものがあります。しかし、何か新しいことができるようになったことだけに目が向いてしまうと一方的に新しいことを教え込んだり、大人が必要と考える活動を次々と与えたりしていくだけの教育になってしまう恐れがあります。発達とは、単に「何かができるようになること」ではなく、人格の全体にかかわる深い意味をもつこととしてとらえなくてはなりません。

先にも述べたとおり、幼児は、自ら能動的に環境に働き掛け、発達に必要な経験を得ていく力をもっています。したがって、まず、幼児が発達しようとしている姿を読み取る目が必要です。

毎日同じ遊びを繰り返しているようでも、幼児はその中で日々新たなことへの挑戦を試みているものです。一見すると「この子はまたこの遊びにこだわっている」「なかなか遊びが広がらない」というようでも、よく見れば「同じ遊びの中で、この子なりにこんなに経験の意味が深まっているのだ」と気付く場合もあるでしょう。

幼児が周りの大人に「見て！ 見て！」と真剣に求め、大人が確かに見届けてくれたかどうか繰り返し気にすることがあります。幼児は、このような機会を通して達成感や有能感を味わい、これまでとは違う自分になっていくことを感じ取るのでしょう。このように幼児自身が自分の発達を体験する姿を見守ることが、教師の大切な役割なのです。

次に、幼児の行動から内面を理解することによってどのような発達がなされているかを読み取る必要があります。言葉を変えれば、幼児の行動の意味に留意し、心の動きをなぞっていくことが大切です。例えば、活発に遊んでいる幼児は、その活動に楽しさを発見し、自発的に取り組んで、更に新しい楽しさを発見していることでしょう。一方、それを見ている幼児も、「おもしろそうだな、入れてほしいな」と思ったり、「で

も、だめって言われたらどうしよう」と迷ったり、「どうしたら入れてもらえるだろう」と考えたりしているのかもしれませんが。それもまた幼児にとって環境に能動的にかかわる姿であり、発達にとって意味のある経験といえるのです。このことは、幼児の発達は常に大人にとって望ましい姿として現れるとは限らないことを意味します。幼児の発達する姿は、自己主張や異議申し立て、反抗やこだわりなどとして表されることもあります。そのような大人にとって扱いにくい行動も、その幼児の発達にとって大きな意味をもつものとしてとらえることが必要です。

ところで、幼児の生活する姿に普段から接していれば、その経験を通して自然にある年齢やある時期における幼児の一般的な生活する姿の傾向が分かってくることがあります。入園当初の4歳児は、どのような順序を踏んで集団生活になじんでいくものか、3歳児の場合はどうかといった一般的な傾向は確かに見られるでしょう。このような、一般的な傾向を把握することは保育にどのような意味をもつのでしょうか。

いわゆる発達に関する一般的な傾向が、幼児の現在の姿のみにとらわれることなく、その将来像を見通した指導に生かされるのであれば、それは有意義なことでしょう。例えば、入園の当初泣き叫んでいる幼児やなかなか友達となじめない幼児を見ても、経験豊かな教師はそれほどその姿に振り回されて焦ることなく、落ち着いて適切な対応をすることができるでしょう。それは、豊富な経験からそれらの幼児が次第に幼稚園に慣れ、生活を楽しむようになる過程を心の中で描くことができるからなのです。この意味では、一般的な発達について知ることが、個々の幼児の発達する姿をとらえるために役立つといえます。

しかし、逆にこの一般的な傾向が、教師によって「この子は、まだできない」「この子は発達が遅い」というように、単に発達をはかる基準として用いられるのであれば大きな弊害をもたらすでしょう。例えば、入園当初泣いている幼児に困惑した若い教師が、一般的な傾向として、ほとんどの幼児は、2週間程度で園生活に取り組み始めるものだということを知り「2週間たってもまだ泣きやまないこの子は、どこか問題があるのではないか」と考えて焦るとすれば、適切な援助はできないでしょう。一般的な発達の傾向とは、多くの幼児の様々な姿を集めて、そこから導きだしたものです。したがって、実際には一般的な傾向のとおり発達をする幼児など存在しないといってもよいでしょう。一般的な姿に合わせて幼児の発達を見るのではなく、ほとんどの幼児が通っていく道筋をとらえて、一人一人の幼児が、その道筋をどのように自分

の足で踏み固めながら歩んできているかを読み取る必要があるのです。

発達のだる筋のたどり方には、その幼児らしい特性があります。ある幼児は、運動機能に関する側面が早く伸びたり、他の幼児は、言葉の面の伸びが早く表面に表れたりします。また、ある面が伸びてくると他の面の伸びが目立たなくなるということもあります。発達する姿をとらえる際には、発達の様々な面には相互関連性や個別性があることを十分に理解することが必要でしょう。

幼児の発達する姿は、具体的な生活の中で興味や関心が、どのように広げられたり深められたりしているか、遊びの傾向はどうか、生活への取り組み方はなど、生活する姿の変化を丁寧に見ていくことによってとらえることができます。



(4) 集団と個の関係をとらえる

毎日の保育は一人一人の幼児の発達を促すための営みですが、それは、教師と大勢の同年代の幼児が共に生活することを通して行われるものです。すなわち、一人一人の幼児の発達は、集団のもつ様々な教育機能によって促されるということが出来ます。

幼稚園における集団での生活を通して、幼児の発達がどのように促されていくかについては、幼稚園教育要領解説序章第2節で詳しく述べられています。保育を行うためには個々を見る目と集団を見る目の両方が必要です。幼児の集団としての姿と一人一人の姿とは互いに独立したものではないので、全体をとらえていくことで、一人一人の発達やその子らしさもよく見えてきます。その上で、集団と個々の幼児との関係を受け止めて、具体的な保育の手立てを考えていかなければなりません。

幼児期は同年代の幼児と生活する中で育つ部分が多いのですが、だからといってどのような集団でも中に入れさえすれば育つということではありません。幼児と教師がつくっている集団が、果たして幼児期の発達を促す場として、ふさわしいものになっているかどうか、折に触れて確かめることが必要でしょう。

〈事例：入園当初の姿から（4歳児）〉

M児は、集団生活の経験が初めてである。登園すると廊下にあるロッカーに鞆を置き、他の幼児が自分の好きな場や遊具にかかわって遊んでいる様子を廊下やテラスから見ている。「Mちゃん、お部屋に入って遊んでいいんだよ」と声をかけると、表情をこわばらせて体が硬くなってしまふ。手をつなごうとしたり遊びに誘おうとすると足をふんばったりして、部屋に入りたくない気持ちを体で表現する。とうとう帰る時間まで廊下にいる日が3日も続いた。M児のテンポで幼稚園に慣れて欲しいと思い、教師はできるだけ楽しそうに他の幼児と遊び、時々、M児の方に声をかけたり笑いかけたりするようにしてみた。M児は、友達や先生が遊んでいるのをじっと見ていると思わず笑ったり、くるっと片足で回ってみたりしながら、そこにいることを楽しんでいるようであった。他の幼児が、教師の周りや好きな遊具で遊ぶことを通して、安心して過ごせるようになってきており、皆と一緒に紙芝居を見たり、歌ったりすることなども楽しむ姿が見られることから、教師はM児を無理に皆の中に引き込むことはしなかった。M児が心の中で

他の幼児と共に活動しながら、やがて、もっと自由に幼稚園生活を楽しめるようになることを期待したのである。

一か月後、M児の姿は、すっかり皆に溶け込んでいた。

M児が集団生活を自分の中に受け入れていく背景には、それぞれの幼児が自分の好きな遊びに取り組んだり、教師と楽しく過ごしたりすることのできる集団の存在とM児の心の動きや過ごし方を温かく見守る教師の存在があったといえます。そのような集団の中で幼児は成長していくのです。

一般的にいえば、幼児は教師との結び付きを基に安定した生活をするようになり、自分から動けるようになります。それを基盤として、幼児は自然に友達を求めるようになります。そして、友達関係の中で、互いの存在を認め合ったり、モデルになったり、ぶつかり合ったりするなど様々な体験をし、それを成長の糧としていくのです。しかし、すべての幼児が同じように発達するわけではありません。また発達の姿は、集団の成長との関係で様々に変わるものです。どのようなときにどのような育ちを期待して、一人一人に援助をしたらよいかは、教師が幼児と生活を共にしながら集団と個の関係をとらえて判断していかなければならないのです。



(5) 保育を見直す

幼児を理解することも、評価することも、すべて教師が自分自身の保育を見直し、改善するためのものといってよいでしょう。幼稚園では保育を行うために、幼児の生活する姿から、あらかじめ具体的なねらいや内容、環境の構成などの指導の順序や方法を考えて指導計画を作成します。しかし、保育は教師が考えた指導計画のとおり幼児を動かすものではありません。実際に保育を展開し、その中で幼児の姿をとらえなおしながら、計画を絶えず組み替えて保育を改善していかなければなりません。つまり、幼児理解と評価は、計画を立てて保育を展開することと一体となっているものなのです。

一日の保育が終わった後、その日の保育を振り返って、一人一人の幼児との触れ合いや様々な活動する姿をたどってみましょう。そうすると、あのときF児はなぜあのような行動をしたのだろうかと考えてみたり、教師として自分はどうすればよかったのかを反省したり、K児の工夫する姿に感動して、明日はもっとK児の力が発揮できるようにするにはと考えたり、実際の幼児の生活する姿と教師のイメージとのずれに気付くなど、様々なことが起こると思います。こうして心に残った出来事を記録したり、話し合ったりすることで明日の保育を考える手掛かりができます。また一人一人の幼児の発達をとらえ直すこともできます。

適切な指導計画を作成し、よりよい保育を展開するには、保育を見直すことが必要です。しかし、保育を改善することは、幼児の生活する姿からその子らしさや、経験していること、伸びようとしていることをとらえるというような、いわゆる幼児理解だけでできることではありません。教師がそのような幼児理解の上に立って、どのよ



うな方向に育ててほしいのか、そのためにどのような経験を積み重ねることが必要なのかを考え、教師の願いや見通しをもつ必要があるのです。指導計画を作成する際にもつ具体的なねらいは、このようなプロセスから生み出されてくるものです。

幼児を理解し、保育を見直していく際にはいつも、教師自身がつくった「ねらい」が念頭に置かれている必要があります。それを踏まえて、環境を構成するなどの必要な援助を改善していくのです。同時に幼児の姿から「ねらい」の再検討をしなければなりません。もちろん、幼稚園における「ねらい」は到達目標ではなく育つ方向性を示すものですから、一人一人の幼児が「ねらい」に向けてどのように育っていくのかを見る必要があります。

さらに、教師が自分自身のかかわり方に気付くことは非常に重要です。しかし、自分の言動は見えにくいものですし、問題点に気付くにはエネルギーが必要です。また、幼児に対する評価も、指導に対する評価も、それぞれの教師がもっている保育観によって異なってきます。それゆえ、自分ではごく当たり前だと思って繰り返している保育を見直すためには多くの人と話し合ったり、様々な実践に触れたりして、自分の保育観を確かめることが必要になります。評価とは自分の保育を見直し続けることであり、そのような教師の姿勢がよりよい保育を生み出すのです。